特4
972

眞書
重訂釋迦八相倭文庫四編下之卷

東都　萬亭應賀原著
花笠文京重訂

第八回　善惡の結果

去る程に悪達太子の提婆が爲に迦夷衛國にて危ふき虎狼の口を脱れ耶輸陀羅女と駛船にて叔父甘露飯の住國旃奈良城へ到着此處にて物の具供人數多借求め恙なく迦毘羅城の新宮へ還幸まし〳〵けるに優陀夷夫〳〵の者も安堵の思ひを語りなるほどなく右梵士太郎御跡より御供人を連歸りたる其の次第を優陀夷迄申し上れば太子の御耳へも入最ご愛で給ひて又も迦夷衛國へ赴け耶輸陀羅女と婚姻の儀式のことを語らせければ頓て吉日を選び迦夷衛國より種々の贈物を整へ數多の役人を添て美々しく迦毘羅城へ送られけゝと近國へ聞えれる故に他事で謀れし提婆達太我手のものを太子と見違へ生捕せんとの腹立ちさ其の報ひの耶輸陀羅女の婚姻を道に待ち要け奪い取んと計ちかど何者の知らせにや姫の早や迦毘羅城へ過し頃行了と聞き切歯をなして口惜ごり愈々反逆い止ざるを去るべ迦毘羅城にてけふ吉日の御祝ひとて奥殿にて耶輸陀羅女と婚姻の盃合取ると換

眞書釋迦八相傳文庫四編下之巻
重訂

東都 萬亭應賀原著
花笠文京重訂

第八回 善惡の結果

去る程に悪達太子の提婆が爲に迦夷衛國にて危ふき虎狼の口を脱れ耶輸陀羅女と駛船にて叔父甘露飯の住國那奈良城へ到着此處にて物の具供人數多借求め悉くに迦毘羅城の新宮へ還幸まーけるに優陀夷夫〳〵の者も安堵の思ひを語りなるほどあく右梵士太郎御跡より御供人を連歸りたる其の次第を優陀夷迄申し上れば太子の御耳へも入最ど愛で紛ひて又も迦夷衛國へ赴け耶輸陀羅女と婚姻の儀式のことを語らせければ頓て吉日を選び迦夷衛國よりい種々の贈物を整へ數多の役人を添て美々ーく迦毘羅城へ送られけゝと近國へ聞にける故に飽まで謀れー提婆達太我手のものを太子と見違へ生擒せんとの腹立ちさ其の報おい耶輸陀羅女の婚姻を道に待ち要け奪い取んと計ちかど何者の知らせにあや姫い早や迦毘羅城へ過ー頃行了と聞き切齒をして口惜ごり愈々反逆い止ざるさ去るば迦毘羅城にていけふ吉日の御祝ひとて奥殿にて耶輸陀羅女と婚姻の盃合取ると換

玄千秋萬歲と
目出さく婚義
を催ふさをけ
れバ淨飯王を
始め轎蟹彌の
方も末頼も玄
げゐ喜悅給ふ
夫れゐ引き換
へ愛きゝ鹿野
女瞿陀彌女の
兩人の姫ゐり
同玄御伽の役
ゐから耶輸陀

羅女の方ゝ太子殊
更寵愛あるゆゑ人
の用ひも平凡ゐら
ずと我拙さおきを
願みゼ兩人とも心
の裡ゐ耶輸陀羅女
と嫉妬嘆ち給へバ其の次々の
女中バ相互ひゐ我勤むる主人
を耳只大切と思ふものから何
とゼ此處の姫君の方へ御通ひ
あれか玄と種々ゐ心を碎き鹿
野女の局ゝ瞿陀彌女の方と惡
み又瞿陀彌女の局ゝ耶輸陀羅

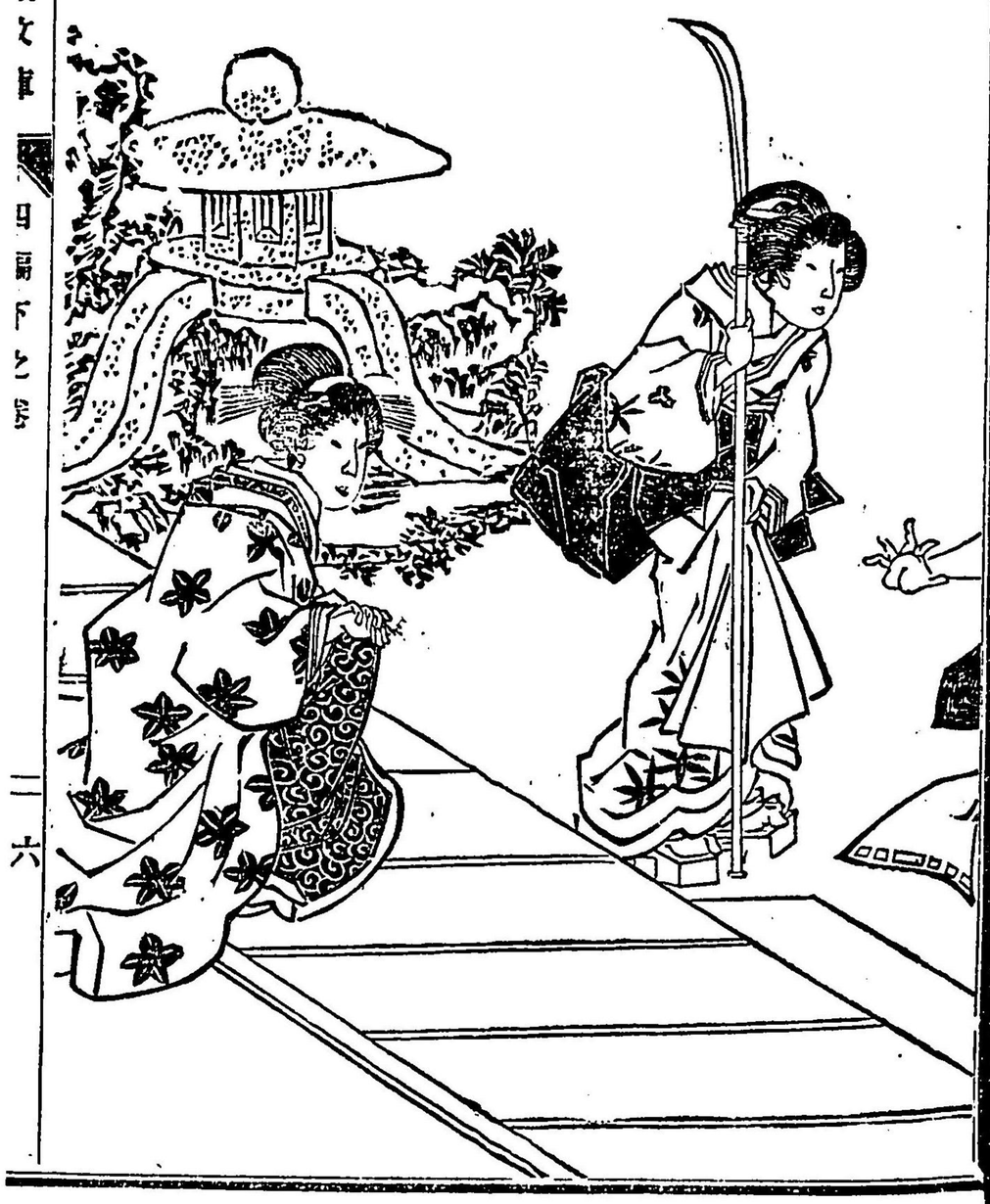
女の方を嫉妬み又耶輸陀羅女の局ゝ我房へ太子の御通ひの繁々あるを高慢かけこれ見よがゑと誇りけるゆゑ三女の方の人々ゝ局多門ゐ至るまで往復ひゐも肩で風きり互ひゐ言葉も通ざると轎曇彌の御耳ゐ入り箇ゝ安堵からぬとぞかゝ若や太子の身の上ゐ奇危ともあふんかと優陀夷の女房と召れつゝ三女の方を御居間へ招くべしとありけれゞ直當ゐ此旨三人の姫君ゐ言上ればコハ何事と思ひあがら互ひゐ衣服を着飾て我劣ふじと時を違へゞ月影殿へ運歩けれゞ轎曇彌の方三人の后姫を厚遇ゐゑ給ひつゝ移漏て仰せ出さるゝ御言葉ゐ「如何ゐ姫達あらゞめて言ひ聞と事外ゐもあらず夫れ女ゝ我人共ゐ高貴も卑賤も總べて三つの油斷ゐ此の三つの澁滯ゝ如何ほど心ゐ愼みても忍たれぬものゐて不善ぬとあれゞ慥ゐ諭訓まぬふそる故ゑ三人とも心ゐ心と附て克く守り給へさて其の三つの油斷と申そゝ第一ゐゝ睡眠未練とて心うち解無締く眠り二つゐゝ自慢未練とて徒らゐ我身を誇耀て人を蔑視ゐ見くだし三つゐゝ嫉妬の未練とてこゝ特別て不善かふず各自ゐ威勢を爭そひて遂ゐゝ自己が命を捨ても人を木釘て恐ーき悪略と逞出れゞ世醜ゐも嫉妬ゐき女ゝ百拙を掩ふとありて嫉妬の一念さへゐけれゝ百の悪きことを覆そとかや如斯ゐ諭誡たるとあれゞ女ゝ淺間敷ものゐして今姫ゞちゐ諭教ぬゐ自己さへも一度ゝ其の嫉妬ゐて罪ゐきものを嫉つ誹謗つゑゞりしが氣附きてゝ我身で自身を怨恨く思ひゑよゝ大略そ其の邪念を鐲却りされゑ其方達ゝ心も詞も正直きゐ衆外それ等の淺間敷き志ーゝ持れまトゐれども同ト太子へ入換引替枕藉と勤むれゞ若やと痛惱言ひ听すれゞ何卒三人の心を一ゐして親近不離太子と守護ゐゞ發心の御望ゐる太子も御心を此宮ゐ止め給へゞ上ゝ言外ゐり下萬民卑賤の末のものまでも天下國土の豊富きを喜悅ときも來るべけれ若さもゐくて諸姫ゞ嫉妬深きともゐふゞ太子の御血胤ゝ勿論毎度の御枕進も無幾愛憎を盡されて玉傍をゞ擯斥ふれ淺智短才ものと人々ゐ後指を指るべー此處ゐ能く心を附よ例へ表外ゝ含嬌呈媚とも嫉妬の心ゐるときゝ雲髻綠髮も大蛇とありひさげの水も湯と湧沸かれゞ忍耐みても尙忍耐み度ゝ此道の教誡ゐり皆ゐ召使ふ女婢共へも我主人の威ゐ誇ゑ彼首此首の姫達を蔑視ゐそるとゐく三世の緣を結ぶとも朋輩の中親睦く交際ふ樣ゐ云ひ聞せよと纖細ゐる訓ごとゐ姫達ゝ證悪と胸肝ゐ當へて俛伏き暗涙涕の外ぞゐき一間を隔ちて扣へたる三人の姫の侍人ゝ居常の心の荒悪ーきゐ愧悪て外れ聽身の愁苦少時言葉もゐき折かふ轎曇彌ゝ三人の后姫と厚く慰勞ひて身の休息を給わりけれゞ皆ゐ夫〳〵ゑ別をと告げ頓て閨房へゞ歸りける去をゞ當年も經過太子の御加齡とや十六ゐゐふせ玉ひ御壯裝殊ゑ靈艶く枕藉ゑかーづく姫達ゝ何卒われ第一ゑ御血胤を

懷胎して揚稱されんものと爲圖つゝ瞿陀彌女の方よりて太子の御慰心よ事寄せて數多の小鳥を聚めつゝこれを庭園よ並列おき太子の御入と待ち要けて不殘ず籠の内より放てゝ小鳥ゝ嬉ゑげよ動翼一つゝ此處彼處へ飛び廻りて友呼びかゝそ是よさへ月下氷人のかゝそかや羽色よ愛て追廻り膠漆一く契りぬる夫婦なかさへ何とあく艶冶小鳥の有樣よ皆〳〵心と空よして計らず興よ入たるも之れ瞿陀彌女ゞ夫となく情願ひ達せんと神ゐ誓の放生會よ前後をして我れ先よ若君懷胎せんと祈る心と知れける去をゞ又鹿野女の方ゝ過去頃より如何よしてか太子の御通ひ絶けるを悲ミ嘆きて此程ゝ太く病の床よ就き只鬱々と身を悔て玉輿さへ賴なく思ひ煩ひ給ふより御枕頭へ年長ミる局ゞの朝夕附き添て藥なゞ進めて諫るやう「姫君いかゞまし升そや此程ゝ太子樣暫時おん通ひゝ遠ざかるとも此方よさへ異變なく丹心を以て朝暮よ太子を御慕ひ遊むさゞ其の深實を神佛も必定ゞ感應まゑ〳〵て今よも太子の枉玉趾あるべきゝ知れてある若その時ゝ御煩よて姫よゝ如何ゞ遊ゞすゞ兎角御心を取直ゑ浮々と遊ゞせゞ病氣平癒うさがひあゝ其よ附き私ゝ下賤ゞの物知り顔よ侍れ共尊き聖人ゞの言ひゝとよ抑も彌陀の五佛とて阿彌陀觀音聖師地藏量就を深く御信仰あそむせゞ病氣全快も疑ひなゝと豫てより聞侍れゞ此五佛を御信心ありてお藥と召あゞらせ給へと含涙て申

夕れゞ鹿野女も漸〳〵枕を擡げ浮流涙をおん袖よて抓とらひつゝ曰ふ樣「チ、能てそ來ゝて給る此程から其方を始め皆のものゞの氣を痛め心と盡ての看病嘸ゞ愚痴ぬ女子ゝやと目下視もあらんおを ど自らとて見る影もなき身の斯まで難有き出世を顧みて假事よも太子へ客氣がまゝき事おき樣よと心を責るゞ斯長ゝて思ゝざる此病氣今より其方が語りたる御佛を祈りて平癒を願ゝんと曰へゞ局ゝ尙ほ進み寄り「其の五佛の内よも觀音ゝ三十三体分身まゑ〳〵ゝる中よも千手よ變ゝて地獄堂の三障ゝ破り正觀音ゝ變じてゝ餓鬼道を救ひ馬頭ゝ變ゝてゝ畜生道を救け十一面ゝ變ゝてゝ修羅道を救ひ後眞觀音ゝ變ゝてゝ人道を助け如意輪ゝ變ゝてゝ天道の三せうゝ破り給ふ是を即ち六觀音ゝ申し奉まつると事細やかゐ述けゞゞ鹿野女ゝ聽て首頷給ひ「成程々々觀音の誓も誠實よ難有く五佛の内ゞの御佛でも誓ゝ凡て尊けれど地藏菩薩ゝ自己の代身よ立ち給ひゝともおゝそゞを先づ此の報恩を營ミ父母の菩提をも吊ひ度ゝ心よゝ束の間も忘却やらねゞ何を云ふよも宮事への身唯思ふ計りで空よ日月を過ぬるゝ之のゝ心よ懸り侍ゞゝ嘆ゞ局又云ふやう「コハ左程よ御思召ゞ早く地藏ゝ信心遊ゞせ此の御佛ゝ殊更よ女子を保護給ふとりや抑も地藏よ十種の福ゝ申て第一よ女子泰産二つよゝ慈根具足三よゝ諸病恤助四よゝ壽命長延五よゝ聰明智惠六よゝ財寶永愛七よ

ん愛嬌八よん米穀上熟九よん神明加護十よん大菩提を願そと申せバ此の御佛の名號を千偏唱へて少き紙一枚へ認め之と千枚認むれバ百万偏の功德よて即ち海や川へ流ーて葛無く果ー無縁衆生の亡者の爲よ施餓鬼ーて使んそときん其の名號の功力よて偏く成道を遂て安樂國よ生ぜるゆゑ此の上もなき大善根去をバ貴處さまの御病も癒え終よん太子の御血胤を宿胎御壽命長久の基ひ殊更よ承まんをバ太子樣九歳の御時の事かとよ鬱蘭の院へ移らせ給ひーとき空野よて既よ早や御最期ともなる處を優陀夷夫婦ゞ地藏菩薩を一途よ信仰せーゆゑ薩陀の誓ひ御命も恙なく十善太子の若君と目出度御繁昌遊バさるれバ今より其の御營を早々御思召給へと甚く勸めまいらそれ心鹿野女ん自ら氣を勵まー漸次よーて起あごり身も硯も清淨つ丶漸ら机よ打向ひて地藏菩薩の名號を千度唱出て一枚認め日を重て思ひのま丶よ既よ千枚認め訖りてをよて百万同の功德なり早く川へ流そべーとて自ら手箱へ入給ひ御傍御次と勤ぬる女中へ使を仰せ附けらる去バか使の女中達ん外珍えく喜悅つ丶供人召連を迦毘羅城を急ぎ立ち出で近傍ある川の橋へ赴きつ丶携へたる彼の名號を毎手よ取て一握りづ丶亡者の爲よ施そとて流をよ向ひて拋投放てバ水風よ靡き飄飛ありさま恰ゞら時あらぬ雪かと愛ぞ取囃そ人もあり又物よ慈悲ある人ん此の善根を深く愛て共よ佛心と起るわゞけり其ん扨て置て此處ふ又月影殿よん驕曇彌の徒然を慰諭る廣元共が戯謔て笑ひ催そ折からよお庭園の扃を叩音皆〳〵聞附耳立て聽ぞ正直く男の聲色コハ何者と女中達四五人起て階梯より裡履穿て立ち出ぞ見れバ强猛ごのまーき一人の雜式箔丁烏帽子を懸幕も賢き雲井の御庭口殊よ後宮男禁制の規律と破り來るん曲者取逃そなと各自が早くも長刀おつ取て趨せ行威勢よ彼の男たかゞ女と侮慢ーも弱そたりけん後じさりそるを年長なる女中詰寄て「ヤア其首ゐ曲者逃るとも遁そうか御前間近入り來りーん若表て御門を守護新參の雜式よて不案内ゆゑ蹈迷ひ此處とも知らず來りーか但また樣子あつてか何よもせよ應同次第をめ〳〵と生てん歸さぬ規律なりイザ有樣を白狀せよと最も嚴く責め問バ流石の男も恐縮と沙よ座を組を繞圍ー女の忿怒と諭めんと手を擧て答ふる樣「イヤ之れ女中方騷ぐまい〳〵我儕ん雜式とやら鵝津式とやら云ふやうな者でいない遁か以前のとあごのふ淨飯王位よ即き千五百人の宮女を抱へられさる其の中よて好容夫人と呼いるゝん顯在の我が妹ゐをバ過日より度々逢よ來れども四の五の云ふて會合て呉ぞ死亡とやら健康やら更よ便義も分明らぬゆゑ思ひ附て南門の番人よ酒飲せ烏帽子箔丁をかりそめの衛士よ擬うて來かゝん淨飯王ゐ會合ぬ中ん還ぬ〳〵早く取次で會合て給をと投だそ樣よ云ひけれと女ともん更よ聞入をず各自

互ひよ目配せーて追除んとそる後の方「ヤレ
暫時女どもと轎曇彌の
方階梯へ出給ひて曰ふ
よう「如何よそのもの
此處へ近うと呼せ給ふよ女中達ゝ
打驚きつ目ひき袖ひき手持無沙汰
よ見えける内轎曇彌ゝ件の男を佶
と見て曰ふ樣「そも爾ゝ何者ぞと尋らるゝ
詞の下これこそ豫て聞及びー轎曇彌なるべ
ーと男ゝ膝をつき直ー「我儕ゝ淨飯王の由
緣の者此處まで來りーゝ他事ならず少願ひ
きとある故ゑと輕忽の言葉を聞兼て女中達
口々よ「こゝな下郎の分才よて尊貴なくも



十善天子の因緣
のものとゝ疎忽
千万愛き目を見
せんと起かゝるを又轎曇彌遮止
給ひて「如何よ
も女共の申を通
り因有のものと
ゝ聞樂でたー其
れある下司先づ
抱を隱さぐ仔細
を語をと曰へバ
「ハテ最前も云

ふ如く好容夫人の兄なれバ遠慮せぞよ此處まぞと云いせも果てず橋曇彌「成程思へバ過つる年千五百人の宮女とバ召ち抱へられたる其中ゑ好容と申そい妹摩耶の腰元で在けるゲ摩耶夫人逝去の後青龍殿の女子共い上下の差別なく皆〳〵紀念を給いりて御暇を下賜たるゑ好容のゑ宮中ゑ殘り居る所以なー對襟合ぬと申と愛き目見ぞそと叱り給へバ彼の男い冷笑「ハ、此方い未ゞ何ゑも知ぬのトやあ「知ぬといそりや何を「サア知ぬが佛ゑ語り聞そい莫大罪ゐなるけをゞ言ねバ此方の頼を聽まい必ず〳〵我か口から聞たとい云ふまいぞや今語れー如く摩耶夫人の腰元を勤ゑる我妹いつの間ゐやゝ淨飯王の情を蒙け雨風たゝぬ戀の海ゐ夜々忍て曳網の可愛可惜の積てから摩耶夫人逝去の跡い女中殘ぞ御暇でゑれども好容夫人只獨此月影殿の南の蜜樹破利舍那殿へ移ー置き無間隙通ひ給ひー故此頃安康と太子を産ゑ名を難陀太子と申ーつゝ優陀夷の息子槃特をこれゐ傅け置るゝとまぞ我詳細ゐ知りゑる故ゑ妹の縁ゑ結ゆまて淨飯王の囚縁のものと云ひたるゲ誤りかこれ云ふからい莫大の賞美の黄金取ねバならぬサア黄金とと手を差延べ何の遠慮もわら男の言葉を能と聽給ひて始て悟る橋曇彌さていと計り打首低き忽ち言葉を改めて「如何ゑ其をなる男下司下郎と見侮りーい此方の疎走和主ゲ願ひ逐一ゑ聽届けたりさりながら其体ゑては縦令へ帝ゑ由縁あるとて表ゑ披露もなりかゑけれバ先づ今日い立歸りて此後衣服を改ためて夫〳〵の供をも召ー具ー表向き參内あれ其時い自らが帝へ取なー參らせて黄金い愚か一家土の國王ゑも取立てん此の義得心あるならバ少ーも早く歸られよと理の當然ゑ籠られて再び復ぞ言葉もなく去聲と應へて件の男い元の路へと立ち歸る跡見送りて橋曇彌一間の内へ入り給ひ本意なきさまゑて曰ふやう「今日と云ふ今日案外けなく由なきとを聞侍べり心ゑ懸る一苦勞よもやとい思へども過ー頃より帝の素振御通ひの絶斷ゑるい實ゑもと思ひ圖るゝ若去とも有ならバ帝い隱ー給ふとも優陀夷夫婦命婦等ゞの密かゑ告て呉るべきゑ我ゑ匿みーい情なやと嘆ち涙ゑ暮れ給へバ居合ぞ局聞き兼て「その怨言い御道理樣手前なぞも去るとい米だ夢ゑも聞き侍ふぞ思へバ聞えぬ帝の御心可憎い好容夫人よと心を汲ての執成を聞より橋曇彌局ゑ向ひ「ソリヤ其方い何云ふぞ帝いさて置き好容をも自らゞの何ぞ怨恨ぞなきとゑてい有まじきを聊か苦ーかふねとも斯るとのおいそるなら疾より明ー給ゑらバ縦令へ太子御誕生ありても其時々の御祝も我」先ゑ計ひて善ゞの上ゐも加善ゑ育て申ぞゑ爾いなくて深く包せ給ふを見れバ此後とても無や無我身ゑ愛憎が盡給ひ後悪きと爲給ふべー兎も角も事の實否を聞き正ーてと曰へい局い尚も進ぞより「夫れとそ最安き事過ー年摩耶夫人の供御の役を

勤めし女御逝去の後御暇いで今でゝ靭師の夜刄軍士とか云へるものゝ女房とあり名を吉祥と呼を侍りて女の業ゝ小間物類を賣商ひ此の御殿ゝ勿論の事破利舎那殿へも赴く由此の者ゝ密ゝ頼を事の虚實と承まゝらんと云へゝ輪曇彌眉を蹙の「如何ゝも其の女ゝ妹ごの未だ存生の内一二度面會ともありしが若ー近き中來るふゞ此方へ密ゝ呼び寄せよと仰せと聞きて局ゝ敬を彼の吉祥が來る日を屈指て待やどゝ何心なく吉祥ゝ戀の重荷ゝ交換て世帯の煙炊細けれゞ女ながらも重荷を背負ひ其首ゝ此首ゝと馳奔き心ゝ染ぬ世事賣虚も世渡る業と房々の口を窺見て殘りなく炎蒸冷寒の捨言葉ゝ待ち焦きる那の局ゝ夫れと見るより呼び入れつゝ頓て御前の首尾を伺ゞひ輪曇彌の御居間へ密ゝ案内せー程ゝ輪曇彌ゝ吉祥を近く召れて破利舎那殿の有様を悉密尋ね問ひ給ひて又御心の有涯と依頼聞え給ひつゝ此の日ゝ身の暇を給ゝりける其れよりして局役ゝ召使わをし件の女中を俄爾ゝ老女格ゝ引き上げらを是まで深く親睦給ひし優陀夷夫婦命婦まで何とおく御機嫌ゝ合ず餘所ーき御振舞となりける故ゝ件の人々それとゝ知ぞ如何なることのおとそるかと心の中ゝ案ト暮も遣理ありけり去ゞ又破利舎那殿の好容夫人と申ーけるゝ始ゝ青龍殿なる摩耶夫人の腰元を勸めれゝせーが鬢髪容姿から裙端裾片まで淨飯王の御意ゝ投合折々の御戯れ積々ゝ御慈愛彌増ーて終ゝ此處へ移され給ひ此程太子を儲つゝ御名を難陀太子と呼れ給ひ御齢そでゝ三才ゝて殊ゝ智慧かーとくまーゝ帝も一入愛で給へゞ如何ゝある事の御ゝしまそゝや輪曇彌の方御親族へも御誕生の御廣告おく只御伽ゝ優陀夷の息子槃特獨と傅けふれて好容夫人の召使とても僅少ゝ侍け置き給ふゆゑ乳母の心ゝ心ならぞ同ド帝の御血統ゝて摩耶夫人の生み給ひー悉達太子の御威勢ゝ人の尊敬ひと方なふぞ顯在の弟君ゝ日蔭の花の如くゝて何となく乳母までごの肩身狹きゝ憂とまし嘆つ中ゝも浮遊ぬる槃特ゝ愚鈍なをども順柔く難陀太子ゝ事づきて御意ゝ乖違す聽へゞ太子も又槃特ならでゝ居常ゝ友とし給ゝず隔絶ぬ仲の戯をゝ太子槃特を御膝下へ召給ひ「コレ其方ごの名ゝ何と云ふ聞まほーやと御意あれゝ「又しても太子樣の笑止こと御尋ね遊ゞそ私の名ゝ彼の物ドや「サァなんとじやと責給へゞ赧顔めて頭を抓きさし極りしを見給ふより「又忘れたか其方ごの名ゝ槃特と云ふのドやぞ今度ゝ必ず忘ごまいぞ而其方が父の名ゝ覺にて居るかサァ何じや「ハイ、、記臆て居まそとも「ホウ何と云ふぞ「父さんと申まそと小兒心答ゝ太子を始め乳母まで笑ひを催そ高聲ゝ好容夫人も立ち出で給ひ「喃槃特幾回も敎へ置たゝ最忘きてか其方ごの父の名ゝ優陀夷と聞くより槃特打ち首低き懐中より書留文と取出して繰り開き彼處此處を讀て見て「成程父ゞ名ゝ優

陀夷私玄の名ハ槃特太子様ハ難陀様と皆な書き記して置ましたと阿房ながらも辛氣なる折から西ゟ入かゝる夕日階梯ゟ差し込ゞ満開きさる堅敷の裡へ居合せ人の影法師背長も長く壁漏へ映るを見るより槃特ハ忽耐驚き起騒ぎて「箇ハ恠像の者の來りしと逃をゞ附き添己のが影彼首此首へ趨をども尚附き纏ふゟ敵ハじと手を振り擧をゞ彼方でも等く擧る手の影ゟ愈々恐をて居合しさる乳母ゟ取附き泣き出せゞ乳人ハ可笑さ耐へ兼ね思ハず聲立て笑へどもまた槃特の心の恐さハ左もありなんと不取敢障子を忽さと〆閉をゞ槃特ハ溜息つき「アラ嬉しや曲者ハ何處へか失さと座ゐ就る折柄ら彼の吉祥ハ居常の如く小間物品々携さへ來りしかゞ好容夫人の宥容を受け頓て御問房へ進み入り何くをとなく御覧ずる内幸ひ當りゟ人もなく克き折を見て轎曇彌の御文を密と差出せゞ好容夫人ハ打驚き共れハ誠か難有や斯御文まで下賜て睦び給ふか忝けなさ疾拜見と封ト目を斷て能と見る程ゟ初より〜て細々と無怨言給ふ文体ゟて太子を此方へ伴ひて疾見せ給へなど細緘ゟ書き認めてありけるを讀過りて吉祥ゟ向ひ「如何ゟも此の御文のやうを自ゞの心ゟハ飛揚ほどゟ嬉しけれど帝を搦き月影殿へ太子と供ゟハ參られぬ今ゟも帝入せ給ハゝ此の御文を御覧ゟ入れ御許を受てこそ直様太子諸共ゟ御面會ゟ赴くべけれゞ夫れまでの處ハ惡からを取つくろひて呉よかゝとて頻ゟ悦べきを体なる故ゟ吉祥も共ゟ嬉しさ袖ゟ掩て退さつゝ其儘月影殿へ赴きて好容夫人ハ御嬉悦しかゞなる由申あぐれゞ轎曇彌ハ其をハ何より嬉しや喃去らゞ今より誰ゟも沙汰おく破利舎那殿へ赴かんと仰あれゞ既ゟ早日も暮されゞと中苑の女中ゞの止め參らそれど「少しも厭ふとハなし自ゞの思ふ仔細あれゞ更々案せを供せよと俄ゟ夜の御運び只中老一人召連れて破利舎那殿へ赴き給へゞ好容夫人ハ難陀太子ゟ添乳して早や眠給ひ〜閨房の扃を叩ハ誰ぞと腰元が開るを遅しと立ち入り給ひて轎曇彌其の腰元ゟ打向ひ「自ハ轎曇彌ありと仰らるゝゟ打驚き思ハず平伏を押し止め「イヤ驚くとハあれ自此處へ來ると前以て知せおゞ何や蚊や手重て皆ゞ嘸や心配ひ去ゞ此由好容ゟ傳へて寢衣の儘ゟて苦しかふねゞ一寸會呉よと云ひ聞けてと言葉婉娓く曰ふよゞ腰元ハ好容の枕頭へ走り往き箇如の事告申せを好容ハ打驚き夜具蒲團遣退そて〜着替の小袖早や持來と云ひつゝ娜奴なき姿よく太子を抱あげ起とそるゟ早や轎曇彌ハ入來り打解たる景色ゟて「イヤこれハ何も夜のゞ衣服を改むるゟも及ハそ太子も就眠さら其儘でと云ひつゝ徐々好容の枕の頭まで進ゞ寄り「如何ゟ久や好容夫人不時ゟ來りて嘸や嘸不審ゟも思ハれ樣が更々疑訝ると勿れ今日文を以て申せ〜如く幾ゟも面會べき筈なれど如何おるとの所以ありてか帝を始め優陀夷夫

婦命婦等迄も其方の身の上太子御誕生の事さへ我身ゑ包ーも
のかゝゑ嘸其方ゑも心憂く思いるべきかと猜せー故へ自ら訪
ゑ來りー而已心安く思いれよと情愛も深き御言葉を聞く好容
い自身から愧て赧む顏と得も舉ぞ消も入たき其の素振輪曇彌
い何うち解て好容の抱きー太子を熟々見て「夫ある
和子い豫て聞く難陀太子ゑましまそかテモ麗わーき
御粧ひ此方へ一寸抱かせてよと手を差延て抱取り給
ひ太子の顏ゑ顏
を附く愛玩給へ
バ目を覺ー莞爾
と含笑給ふより
輪曇彌も最ど愛で給ひて餘念もなき有
樣ゑ好容も難有涙ゑ暮て只言葉もなく

差俛れて居る程ゑ輪
曇彌い太子を抱き暫
時時を移ーけるゞの如
何ゑも別離惜げゑて
今宵い我ゑ借給へと
曰へバ好容い應と答
へて乳母を添へ何卒暫く貴處樣ゑ御育あひ下されバ尙
ほ難有き仕合と恐惶申せバ輪曇彌去バ此儘連歸ふん其
方も何憚らぞ時々此方へ來ふをゑ今宵の無禮御宥容と
と暇乞ひーて出で給へバ好容い又平伏てお疎末さ
まと云ひつゝも送り出でんとーてけるを輪曇彌い
太く押止め太子の乳母引き連て月影殿へ復還ふせ
ふる去ぞ其の明日ゑ早くも此事帝へ聞に殊ゑ且㊀

㊀優陀夷夫婦命婦等いかの母子の事是まで包隱ー面目あさ輪

曇彌の御方へ御目よ懸るさへ最憂苦互ひよ顔と見合せてゝ本意あき由を語る中優陀夷夫婦命婦まで轎曇彌の御召と聞より偖てゝと胸に釘先づ第一よ優陀夷が出で若や兎や角とあるあらば包隠さず有儘申あげる他なーと少も憶せど御前へ出をゝ轎曇彌ゝ難陀太子をこれ見よがーよ抱き給ひて「コハ久や喃優陀夷此の太子を見知りーのと差ー出ー給へとも優陀夷ゝ何の答へもあく差ー俛向ひて居たりーが漸あつて頭を擧げ「御前様へ是まで包ーゝ重々我等が無念ありと辨語うんとそる先を轎曇彌ゝ押止め「イヤ其の辨語を聞くさめに是へ呼び出ーゝせず假事あらぬ若君の御誕生ませーを我身へゝ勿論のと御親族方を始とーく國中殘らず沙汰そべきよ未ざ其のとあき故よそれを急げと申さん爲唯今呼び出せーありと心の怨を言葉よ濁ー不指あく誠めつゝ仰あれば優陀夷ゝ敬み是よりーて難陀太子の御誕生を夫〳〵へ御披露とぞありける故御親族方ゝ勿論のと殿上殿下の人々より種々の獻奉物大殿よ山とあーて御祝を催せらる去ば優陀夷の女房命婦も共よ轎曇彌のふん前へ恐縮と進と出で好容夫人太子様御誕生のとの由を包隠との申分恐れ入りて謝ければ轎曇彌ゝ一度ゝ叱り給へど左のと又恨深ゝ恨み給ゝを御祝日よりーて好容夫人を表向き月影殿へ召出だされ何や簡やと睦親く語り給ふよ次々も心安くゝ思へ共御祝の日よりーて帝ゝ更よ月影殿へ通ゝせふるゝ事もあく好容の方へも入せられねば是尋常とよゝ侍らまとと優陀夷帝の御前よ出で御意の裡を問參らせーよ案の如く轎曇彌沙汰もあく破利舎那殿へ音問ー耳あらず難陀太子を誘ひて月影殿よあるものから流石よ暦とて明白地何を沙よ顔會せん反そ〳〵も本意あきと誰ごの計らひて去とを轎曇彌の耳朶よ入れーど其の者の名を聞まはーと嘆ち給ふよ優陀夷ゝ平俛「如何よも仰御尤もよゝ候へ共隠さとゝ必ずも顯るゝと云ふ譬への如く流言とあく風が便よあるものあれば左のみ御心よ懸給ゝで頼ひ御仲睦親き好容夫人のとあれば愛も變らず御通ひありて太子の御身の上何暮と語ふい給ゝゝ轎曇彌の方も左のみ怨も曰ふまゑ是非とも御入あれかーと彼處を思ひ此處を厭ひ漸よ帝を進めて月影殿へ誘ひーよ轎曇彌ゝ帝と敬ひ頓て四旁の人と遠ざけ帝へ向ひて曰ふ樣如何よ我君聞こーめせ自身ごの過ー歳妹ごの懐胎の頃あるが心ゐ如何ある天魔々神ごの身入りて り罪もあき摩耶を深くも嫉みつゝ無根もおいと爲出せーが折節其の惡念發起ーて夫れからい深く忍耐謹敬て假事よも嫉心を棄てたるが古昔一度不善ある非事ありー者あれば此程好容夫人の身の上を御包あるゝ無埋あふねど左のみ誠心自身を嫌ひ給ひておわーてゝ此方よて兎や角と心を盡と甲斐もあー最早御伽も是までであり宥ー給へと涙ごのふ用心の短刀逆手よ取り「疾より愛悟ゝ定

め侍り女の翼髪の如雲も適誰とよ容梳べき君の心よ適ずゞ慙も早く容姿を變へ尼法師よも成果て煩惱の絆を斷侍ふんと云ひも訖ふず手づゝふよ髻髷を解んと一給ふを帝驚き押止め「ヤヨ慙時待ち給へ歴が心よ何事も隔絶やうゝあけれども好容夫人の身の上と其方よ明さぬものかふよ怨ふるゝゝ理とおぢふ只今其方の懺悔の如く女子と云へゞ雖々も嫉みの心あるあれゞ若も其れ等の淺間敵ともやあふんかと疑ひて包せ一事ゝ宥一てよ去れゞ是より太子をゞ其方のものと養育一又好容とも睦一く親み給ゝゞ如何許りか歴が心の悦喜ず早く心を取直一酒事よても催ふ一給へと最懇よ教訓給ふ言葉の潮よ轎曇彌ゝ嘆ち涙も今更よ添け涙を搔拂ひ「ァ、勿体あや冥加あや墓無い心よ怨一と幾重よも御宥一御免あされて下されかー仰の如く難陀太子を此方へ移一て自身よ養育せさせ給ゝふゞ自身ゞの下々への聞ゝ惡ふず侍るかー如斯まで篤き御惠愛の御心よ御座ませゞ察外此方をゞ怨み給ゝでこれまでの事どもゝ打棄て此後ゝ屹度々々隔て給ゝで御目懸ふれて給ゝれかー と手掌を反そより早くも心打解給へゞ帝も最ど御景色好く俄よ御酒宴を始ふれ其夜ゝ艶冶く語談よ無貳心枕を双べつゝ如何ある夢をや見給ひけんうゞ玉の羽色よありて可愛と鳴て渡れゞ可愛てあふぬ烏の月の夜もあふゞあくーて戀の闇明ぬ國の何時までと男持つ身よ明の鐘聞も憂苦やくゞ

このけの野暮ゐ口うふ後朝ゝ誠實よ遣瀬がおんゝいお獨寐る夜ゝ夢でさへ誠實よ遣瀬ごのおんゝんお と腰元共が口々よ氣も氣散じよ浮れてふ唄ふて通ふ長局ゝ女識の島かと疑かゝる折かゝ急遽一く腰元一人奥の詰所へ趨り來て優陀夷の女房よ打向ひ「只今お玄關先へ案内一て未だ見識なき御客樣の數多の備供よて御入と聞て優陀夷の女房其ゝ何殿の御來駕か先づ是へ御招待疎忽おさやう圖ゝをよと吩咐遣ゝそ程もおく武猛ゲまーき武士の長上下を踏み騷めかし大小貫拔よ差こなして案内者よ連て打通り軟榻よ直をゞ優陀夷の女房禮義正一き挨拶よ件の武士咳々一つゝ「某ゝ好容夫人の兄夜刄軍士と云ふもれおり先以て此度難陀太子の御披露を人傳よ承知ゝり何より以て珍重の義依て其の御祝賀旁轎曇彌の方へ面談の上淨飯王を始め悉達太子難陀太子へも近親の爲これまで推參致せりとさも大威張よ述けをゞ女房ゝ不審の頭を傾け少時何の應答もなく心の内よ思ふやう是まで終よ名も聞ぬ武士おきと如何よせん好容夫人の兄とあをゞ此儘よも歸されドとて「然らゞ御扣召れよと云ひつゝ退き一間へ往き轎曇彌の御前へ出箇樣の由申せゞ轎曇彌上下頭給ひ「成程その者と其方ゝ識ぬ筈自身ゝ一度面會せーとあり必定て今日來りしゝ願ひ望のありてのと只今帝御眠起給ゝゝ彼ゞ身上逐一よ自身ゞ申上んゝ暫時それよて待遇せとの仰よ女房「とゝ云へゞ何

如よも不審のものあれど好容夫人の閨房へ赴き箇如の由尋問よ好容夫人ハ打驚き成程我身よ其の名と呼ぶ一人の兄のありけるぞ乳臭より心曲け悪らぬとのゑ是營て類多の人を煩まそとの度重なりて兩親の威權も更よ用ゐぬゞ彼身年齢二十の頃掛當致ーてより長久く暇もなかりーゞ過よー頃ろ人よ聞ど衣裳さへも肌薄き繿縷を纏ひて失向方ど赤だ心をゞ取直はさど人と殘忍身の放埒その不善ぬ沙汰を聞度よ兩親ハ存生ぬ涙生ぎ損ねし子を持て世間を狹く身を詰て老ての苦勞も彼奴ゆゑと恨てハ嗚咽悔てハ嗚き又ハ世上よ非業よ死せ玄人ありと聞ときハ若や彼奴が所業でハなきかと案じてハ悲歎親心ろ此頃自身も氣付き提婆の臣下に若や又なりハせぬゐと案せしよ只今の御言葉よ大小さゞさゑ衣服正ーく供人召つれ來ぎーと聞て少ーハ安堵ぐべり是而已獨の兄うへを謗るハ悪況とながら不善ものよ候らへど程よき樣よ云ひあーて帝を始め橋曇彌の方へも御面會せハ御無用あり若も后日よ如何やうの事故出來玄其の時ハ自身も兩親も面目なき儘此の義宜く賴ゑ入と事を別さる利發さよ女房も左こそと首領て然ゞ好よ計ひ申さん必ず案ト給ふなと云ひつゝ頓て橋曇彌の御前へ出れハ既ゐ早や彼者よ御面會の顏色あると先づ押止め好容夫人の物語ーかゝーの由詳細かゐ告知せ參らそれど橋曇彌ハ好容の顯在の兄と聞て縱令好容ハ夫れよもせよ自身ゞ打棄て情もなく歸してやらゞハ人々謗りて我名を下そか憂や愁や太子まで儲けー者の兄とあふゞ相應の恩賞授與得さそとも左のゑ帝の御叱り有べくとも思をずと曰ふと女房ハ先づ兎も角も私ーよ御依賴下されと無理に押止め退さて軍士の前へ再び出で「是ハ〳〵貴處さまにハ甚ハ御待遠さまや折惡く今日ハ淨飯王橋曇彌も聊この精康給ハぬゞ御寢房へ引況籠り御座そるゆゑ御對顏なりゞたきまゝ私玄より御參內の御挨拶宜く申せとの仰ありと述るを俟ど夜刄軍士頭を左右へ振立て「ハテ嘩喧ハ女の口端此の度の若君の自身ハ叔父あり其の者を餘りと云へゞ輕卒の對過得心ど尤も過ー頃ろ不思橋曇彌よ面會の節又も參內せー時ハ莫大の恩賞あるべく一家土の國王よも報ずべ況との確乎る言葉今更反古よも致されまハ先づ面會ハ兎も角も此の返答を聞さーと眉毛動ど聞聲よ女房ハ甚く待て餘ー「其を等のとも此方より評議の上よて沙汰せんと欺せど更よ聞入れず「イヤ面當あ橋曇彌よ直談せんと携へー菓子折引さ下げ刀おつ取起立つて一間へ往を無理よ止める禊をゞ無理よこぢ開入んとそる戶端よ入來る優陀夷大臣右梵士太郎よ包を持せ「イヤ待ぎよ夜刄軍士即ち帝の御名代優陀夷これよて面談せんと詞理々ーく述られて地質ハ弱き下司本性恐縮元の座よ歸れゞ優陀夷重て言葉を正ー「此度若君御誕生の御祝賀とーて自身の參內帝よも御滿足某ーより其の挨拶

宜く申せとのこと乃ちこれなる一壺の淨飯王より其方へ贈下る時服一重ね些少なごら受納して歸宅めされよと差し向れて不足顔「イヤこれ優陀夷殿假故おらぬ此度の御祝賀これ丈きの禮物と乞請よ參内の致さぬ妹が縁よて親族となれば帝を始め太子までよ盃の取交せもありさる上よて引出物よの一家土の國の王よも取立らるゝ筈の處さゝ時服の二つや三つ望求ば此方から贈るべー慾よ目ゞ呉れ參内のせぬ眞實を以て來からよの贈物の受取ぬ帝よ面會難のすば太子方へ會そべー若左るともおらぬとあらば妹好容と引き連を還るイザ二つ一つの答應の如何がで御坐優陀夷殿と最荒くゝく云ひけるを優陀夷の听て冷笑ひ「ハテ騒擾ごのーん其の願計略の尾の出ぬ先き乞暇申して早く歸らぬか長居をーさら物種の生命の程か覺束ないと言ひ詰られて心裡ち小氣味惡の思へども今更ら引ての歸られず何卒計略を成就んと言葉慇せず又云ふ樣「イヤ聞惡き其の挨拶計畧の尾の出ぬ前とい抑や如何なる言分ぞ「去ば其元の計略を詳審かよ言ひ聞さん」勅師の夜刄軍士下り居う下り居きと星を指をて流石よ驚愕り去れど顔色の素知ぬ顔「勅師の夜刄軍士とい夫りや疇と「己未も偽るか好容夫人の兄なれど兩親よ長久勘當され今でい勅師よ成り下り下司の營業野山へ出猿猴熊と擊ち捕りて其の皮脱で生計とする繿縷の姿よ假故の損料衣の衣服大小よ供人大勢連をる不審晴ねば此處よ居る右梵士太郎よ見せ使ーよ其の供人い過ー頃ろ悉達太子迦夷衛國よりの還幸を待要ーて右梵士太郎と戰鬪ー提婆が手下の者なれば早や腹中の計略の底と見徹さると知ざるや未だ化粧の表裝顯いさぬ此な人非人めごと白眼られて夜刄軍士い倏忽よ切齒となー傍よ有合ふ白木の臺の時服を俄乎と蹴とばせば包ほどけて裡よりい時服と思ひ懸なくも軍士が常よ衣おれさる繿縷の小袖表出れば流石の軍士忍耐かね「欺計偽誑と思ひーよ早晩か此方ごの見誑ーか早やてれまでと斬り懸さる刄劍を優陀夷い引外ーて身と脱す間の二の太刀よ右梵士の正面へ斬附んとて振擧るを危脱と優陀夷い後より腕を確然と取り止めさる其の隙よ右梵士い差添拔を見るよりも優陀夷い暫時と押止め「此奴救くる者ならねど假故ならぬ好容夫人の兄とあれば是非よ及ぶず只散々よ誠笞て追放ゞ好夫れ右梵士と云いれて喜悅き血氣の壯者勇躍つ思ひ軍士よ向ひ「咄汝い好容の兄とい云へど兼てより長久勘當うけさる身なれば兩親い勿論兄弟の縁い斷絶て今よてい野伏同然の世渡をする其の寒冷心から私良麻國の達婆太子よ黨興ー此の宮中へ姿貌を變異入込て大膽よも害事を爲んとする面魂ひ去れど我帝い聖賢よーて仁心深く御坐せば命と救助下賜すると云ひつゝ大小上下とぎ取りて取寄おきさる件の繿縷を着せ替て其儘よ追出さんとする處へ女房吉祥趨來

り優陀夷よ向ひ手を附て「是ハ私ーの伉儷ゆゑ何卒手前へ御預け下されかーと手を磨て盡辨極語よ謝けれバ幸の者來りとて階梯の下へ降げ優陀夷ハ右梵士引き連て御前へ赴く此處よハ吉祥軍士の胸元押へ涙と共よ怨言「こゝゐ人でなー鬼よ蛇よ路よて容子ハ殘らず聞た大惡無道の提婆よ黨與此の樣なことハ露知ず日來外とバ内よーて戻らぬ故よ此度とて十日廿日も寄附ぬを氣よも懸ぜよ居た中よ此の有樣ハ何事そ忝なくも此宮ハ我身宮事へ云て御恩を受け又一つよハ顯在の其方の妹ゞ極上よ召使れてあるものと何ぞの不足で此の擧動ぞ心柔順よ持ならバ妹の餘恩ぞ度外の御取立よも遇ならバ私も今の下司の業雨露と止て髮髻姿風正大よ夫婦暮そもの抑も連添ー始めより惡ぬ心と知ゐゞら何故月下氷人の神達の結合ゐた緣ゐるか些細ーよ機關の酒事ゐ不思會合初てそれよりも夫婦となれバ其の日ゐら更ゐ家よハ落附ず旦暮慢ーき營業よ小間物類を商賣て少しの代よ炊煙を立て貞操を立て居るものを心强やと鳴咽口説くと軍士ハ蹴仆ー冷笑「ヤア嘩まーい涎涙と嘆顏兩親の威權さへ聞ぬもの女房ハ愚何誰等が何と云ふとて淨飯王へ面談せぬ内ハ往ぬ歸らぬドリヤ對面をと傍よ棄さる菓子の一箱携さへつゝ繿縷の姿の其儘よて奥を目懸て往んとそるを女房ハ遣じと遮ゆれども爭で男の力よ及バん去ども女の一念力遣じ往んと爭合うち軍士ゞの持ちさる菓子の箱水引されて中よりハ飄々散々と落紛る菓子吉祥ハ佶と見てこれゞ此世の名殘ゞと三つ二つ拾ひ取口よ入れつゝ何も又弱ま去ぜ挑み合遣じ放せの其中よ吉祥忽ち手を握空動と坐れバ口よりハ五臟六腑惱亂の血潮を吐てアッと計よ苦痛聲と立さるよ大膽不敵の夜叉軍士も此ハ敵じと階梯なる樣の下へぞ忍びけるとハ知ずーて優陀夷大臣踵よ綿て右梵士太郎ハ好容夫人を誘ひて起ち出で見れバ吉祥ハ手負よ倒りて居ける故箇何故と慰勞バ吉祥ハ去世の聲微幽よ「アヽ有恐ゐや恐ーや此の御殿を瀆涜罰當り偏よ宥ゑ給ハれかー又私ーゞ懺悔そる身の落度の一通ゞ轎曇彌の御方始め好容夫人も一通り御聞屆け下さるべー過ー頃夫軍士大惡無道の達婆方よ黨ーとハ露知ず此の宮の何蚊御容子寢物語よ自根至葉聞るゝ度よ浮々と月影殿の御有樣破利舍那殿の御容子好容夫人難陀太子を產み給ひー事共まで其れと知ねバ明白て語り聞せバ其通り私良麻國へ赴きて内通ーたる而已ゐらぜ曩時大膽よも月影殿へ忍入ゞ轎曇彌の方の御前よて好容夫人の有樣と口よ任て述されバこれより其の御中らひ帝を始め次々まて御不興よなりさるも元と推ゞ皆な私ーの口一つより出さる事其の云分も何とせん女の口の善惡ゐき故と悔みて反復ぬ其中よも只嬉ーきハ轎曇彌の好容夫人と睦親さ御媒ちを致せゑものから一度帝の逆鱗ハ是ありとても終よ又御心解て

愛たき御中我計らひのとなくい御氣毒くも難陀太子い倘何までも日蔭の御身これ程までゞ私しが思ふゝ引換軍士ゞ忍只一途ゝ達婆ゝ驚ー何かゝ附て悉達太子の御身を妨害んとのみ計畧ぬる夫の方ゝ女房ご心と盡ーて味方ゝ從き夫の味方達婆をば女房か敵仇と怨むある夫婦の心かはどまで合ぬゝ云ふも宿世の因緣妻い夫ゝ隨ふの理を守りて此宮を讎敵ゝとれゞ不忠の至り夫れのみあらず此の年㊀

㊁來身のなりいひといい云ひながら多の猪狼と聾

殺ー〻其の報應い何處へ往べき頓て夫婦ご身の上ゝ廻り來りく此の上ゝも如何ある憂目ゝや合ん手づから喰ー此の菓子い其れと悟ーゝ乖違おく毒藥調合の品おりき我身ご最期と御覽じて夫と同腹ぞないえるー御推諒下されよと道理至く哀れある言葉を聞つゝ轎曇彌も一間の内より走り出で好容夫人と諸共ゝ憫然の者と寄り添ひつ〻慰勞る中ゝも好容い我顯在の兄妻と始めて聞て取縋り是までい商人の女々と呼さるも知ぬ故とい云ひおゞら一つい兄の放埒かゝ宥ー給へや自身とて誠實ゝ情おい男よと怨みおゞふも血筋の緣㊀

㊁欲絶不能ぬ妹ゞこれ此の樣ゝ謝び參ふそる喃姉上と手と合せ

最ご涙ゑ暮けれゞ轎曇彌ゝ言葉を改め「疑ひ晴ゑ吉祥ゑ夫ゑ代てこれまでゑ出せゑ忠義の志ざーゝ山ゑ積ともよも盡じ心儘ゑ持れよと聞ゲ此世ゝ乞暇その儘そこゑ止命ゑり右梵士太郎ゝ軍士の行衛彼首此首と尋ーかぞも更ゑ其の影だゑ見ゐず召ゑ具ーたる供人も何時の程ゑか逃失て獨も殘る事あけれゞ何を擒ゑそるものゝ手を空ーく立戻りて此趣ゑ又吉祥ゲ事とも細委ゑ奏ーけれゞ帝ゝ且つ怒り且つ驚き給ひて此吉祥くそ嫐耶夫人存生の節ゝ何呉とゝく殷勤ゑせーものゝ其の應報の爲且ゝ又此の度の忠死を賞そるゑめゑ亡体を厚く取收め禮を重ーて葬埋べゑ又軍士ゲ惡業ゝ甚太惡ゑ者ゝれゞ譬へ好容ゲ兄ゑもせよ山頂野末までも蹤跡を探索ゑ召ー捕へて嚴く正ー其罪と行ふと毫頭も苟偷ゑそるとゝゝれ凡て善を勤るものゝ共志ーを厚く賞美し又惡事をゝと者ゝ嚴く能く戒むると以て國を保有政敎の正道と云ふゝれゞ其役々々の者へ申付け軍士ゝ勿論其の同類其他ゑも斯る曲者あふゞ漏ぬ樣ゑ捕押へ屹度其罪ゑ行へかーと善惡正ーゝ仰を蒙むり餞陀夷御前を退辭て直ゑ吉祥のゝゝ体を懇ゑ取り置せこれを御菩提所の旁ゑ埋葬また夜刄軍士ゲ蹤跡をゝ其れ〳〵へ相布をて嚴く尋ゝせゑける

釋迦八相倭文庫四編下之卷終

明治十六年八月十日出版御届　一冊定價金十五錢　郵税四錢
明治十六年十二月　出版　十冊前金壹圓貳拾錢

重訂人　芝區日蔭町壹丁目一番地　大坂府平民　渡邊義方
出版人　京橋區瀧山町四番地　東京府平民　大野吉之助
出版所　仝　五番地　斯文堂
發兌　仝　四番地　報告堂
取次　神田區神田雉子町　巖々堂
仝　羣馬縣前橋本町　報告堂支店
仝　京橋區南鍛冶町　倉田太一郎
仝　各府縣　書肆

○斯文堂發兌書目

一校訂繪本眞田三代實記　全三十冊毎月二回出版　一冊定價十五錢郵税四錢　五回出版
一眞書重訂釋迦八相倭文庫　全凡三十冊毎月二回又ハ三回出版　一冊定價十五錢郵税四錢
一繪本曾我物語　全四冊毎月二回出版　四冊既刻
一松染情史秋七艸　全四冊毎月二回出版　近刻　一冊正價十錢郵税四錢四冊前金卅五錢
○繪本太閤記　○繪本甲越軍記
○開卷驚奇俠客傳　○俊寛島物語
○朝夷奈巡島記　○近世美少年錄
○皿々鄉談　○常夏双紙

○美農古衣八丈奇談　○繪本漢楚軍談
○繪本通俗三國志
以上近刻

報告堂同盟出版ノ部

○甲部同盟出版書目

一資治通鑑　全六十册　定價廿五圓　豫約廿圓　十二回出版　八回既刷
一漢書評林全凡廿八册　定價十圓　豫約七圓五十錢　十四回出版　六回既刷
一佩文韻府　全百六册　定價八十圓　豫約四十五圓　廿一回出版　三回既刷
一史記評林　全廿五册　定價十圓　豫約上七圓並六圓五十錢　六回出版　二回既刷
一十子全書全三十二册　定價十二圓　豫約七圓十錢　七回出版　近刻

○本部同盟出版書目

一沿革備考官令類聚目錄　全二册　定價四圓二回出版　豫約二圓八十錢近刻
一佛國法理論　全一册　定價一圓郵税二十錢　豫約並五十五錢上七十錢二十四錢
一全刑法詳說　全一册　定價一圓廿五錢郵税卅二錢　豫約並八十錢上一圓四十錢
一全民法解釋　全一册　定價二圓　豫約並一圓廿錢上一圓五十錢　郵税五十八錢
一全訴訟法原論全一册　定價二圓五十錢　豫約並一圓五十錢上一圓八十錢　郵税仝
一全政典　全一册　定價一圓　豫約並五十五錢　上七十錢
一社會學全書　全五十册　一册定價三十錢毎月二回又八三回出版豫約一册二十錢郵税四錢
一名經世原理
一政理汎論　全十二册　一册定價二十錢毎月二回又八三回出版豫約一册十五錢郵税四錢
一全世界一大奇書全卅五册　一册定價廿錢郵税四錢豫約一册十五錢五回既刷
一全　自一回至五回別製合册全一册定價金壹圓郵税廿錢

○乙部同盟出版書目　印刷着手ノ部

一本朝文粹　正全七册定價三圓　豫約二圓　二回出版
續全四册定價三圓　豫約二圓　一回出版
一太平記　全十册　定價三圓　豫約二圓　三回出版　二回既刷
一源平盛衰記　全十五册　定價三圓五十錢　豫約二圓三十錢　四回出版　一回近刻

○同盟出版見本并方法書御入用ノ向ハ二錢ノ郵便税御送附次第呈送スヘシ但シ書籍代價郵便切手ニテ御送附アルハ一割增加アリタシ